第Ⅱ章　薬師寺の歴史

1　寺院の創立

薬師寺は平城京右京六条二坊に寺地を占め，本尊金銅造薬師三尊像，東塔など奈良時代のすぐれた文化遺産を今に伝えている。昭和51年に金堂，同56年に西塔，同59年には中門の復原をみて，現在も伽藍の整備が進行中である。

薬師寺は，都が飛鳥の地にあった天武９年（680）に，天皇が皇后の病気平愈を祈願して発願された。『日本書紀』によれば，十一月癸未に，「皇后体不予。則ち皇后の為に誓願(こいちか)いて，初めて薬師寺を興(た)つ。よりて一百僧を度(いえで)せしむ。是に由りてたひらぎたまうことを得たまえり。」とある。また，東塔擦銘にも同様のことを記しているので[1]，創立発願の年については疑う余地はなく，天皇発願後まもなく薬師寺の造営が開始されたものと思われる。『七大寺年表』には天武11年（682）に「造薬師寺為皇后」とあるのは実際に工事が着工されたことを伝えているのかもしれない。皇后の病は平愈したが，かえって天皇の健康は思わしくなくなり，朱鳥元年（686）９月に崩御された。この年，天武崩御百ケ日に際し，大官・飛鳥・川原・豊浦・坂田の五寺で無遮大会が行なわれているが[2]，ここには薬師寺の名は見えていない。

天武天皇の後を継いだ持統天皇はその２年（688）正月に無遮大会を薬師寺で行った[3]。持統11年（697）６月には公卿百寮が天皇の病平癒祈願の仏像を造り，翌月その開眼会を行なっていることがみえる[4]。この時を以て薬師寺本尊の完成とする説もあるが，薬師寺本尊や金堂は前記した持統２年の無遮大会の時をもって完成したと考えるのが妥当と思われる[5]。

長和４年（1015）撰述の薬師寺本『薬師寺縁起』（以下『縁起』とする。）によれば，持統６年（692）に故天武天皇のために大繡仏が造られ[6]，道昭は文武２年（698）に薬師寺繡仏開眼の賞として大僧都に任ぜられている[7]。

薬師寺の歴史に関しては多くの論考がある。参考文献等については下記を参照されたい。
『奈良六大寺大観　第六巻』「薬師寺全」岩波書店，昭45，太田博太郎「南都六大寺の歴史と年表」岩波書店，昭54大橋一彦『薬師寺』「日本の古寺美術４」保育社昭61

1）『東塔擦銘』
維清原宮馭宇。
天皇即位八年庚辰之歳建子之月以
中宮不念創此伽藍而鋪金未遂龍駕
騰仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業
照先皇之弘誓光後帝之玄功道済郡
生業傅曠劫式於高躅敢勒貞金
其銘曰
巍巍蕩蕩薬師如来大発誓願広
運慈哀猗歟聖王仰延冥助爰
餝霊宇荘厳調御亭亭寶刹
寂寂法城福崇億劫慶溢万
齢

2）『日本書紀』朱鳥元年条。
十二月丁卯朔乙酉。奉為天渟中原瀛真人天皇設無遮大会於五寺。大官。飛鳥。川原。小墾田豊浦。坂田。

3）『日本書紀』持統２年条。
（12月）丁卯。設無遮大会於薬師寺。

4）『日本書紀』持統11年条。
（６月）辛卯。公卿百寮。始造為天皇病所願仏像。
（７月）癸亥。公卿百寮。設開仏眼会於薬師寺。

5）本薬師寺における金堂本尊の完成時期は『縁起』に「流記」の文を引いて，「持統天皇奉造鋳坐者」とし，黒川真頼，関野貞，喜田貞吉はこれを持統11年の開眼としたが，田村吉永，小林剛，町田甲一らは持統２年正月以前に完成していたとする。

6）『縁起』の「講堂」の項。
安置繡仏像１帳。高三丈。広二丈一尺八寸。阿旃陁仏并脇士并天人等惣百餘躰奉繡之。流記帳云。以壬辰四月十二日。奉為飛鳥御清御原宮御宇天皇(天武天皇)。藤原宮御宇天皇(持統天皇)奉造而請坐者。

7）『七大寺年表』文武２年戊戌条。
大僧都道昭(十一月十五日任。薬師寺繡仏開眼講師賞。大僧都始。)

薬師寺の造営はさらに続けられるが，文武２年（698）10月には薬師寺の構作がほぼ終って衆僧を住まわせており[8]，この頃におよんで藤原京における薬師寺の造営はほぼ完成に近づいていたものと考えられる。しかし，大宝元年（701）には造薬師寺司官人が任命され[9]，また同年７月には造大安・薬師寺の官を寮に準ずることを定め，造営はまだ続いていた[10]。大宝３年（705）には持統天皇のため，大安（大官大寺），薬師，元興（飛鳥寺），弘福の４寺で斎が設けられているが[11]，これがこの頃の四大寺であった。この薬師寺がいま橿原市木殿町に金堂と東西両塔の遺跡を残す本薬師寺であることは，その規模や伝承からみて問題のないところである。

現藤原京薬師寺の金堂土壇上には小堂が建つが，南面と西面の礎石16個が小堂の外に残っている。裳階の礎石は残存していないが，平城京の薬師寺金堂と主屋の柱間寸法が一致している。また，東塔跡の土壇上には心礎と15個の礎石が残存しており，裳階の礎石は残っていないものの，主屋の柱間寸法は平城京薬師寺東塔と一致している。土壇東方の発掘調査を行えば，裳階の有無等の問題は明らかになる可能性がある。西塔も土壇の残存状況は良好だが，心礎１個を残すのみで他の礎石は運び出されている。東塔心礎は舎利孔を備えているが，西塔心礎は中心に円形の出枘を造り出すのみで舎利孔はない。東西塔の中心間の寸法および東西塔中心から金堂中心までの寸法は，平城京薬師寺と一致するものである。

金堂・塔の土壇のある所は，岸俊男が復原した藤原京条坊の説によれば右京八条三坊に当る[12]。昭和51年に寺地西南隅の八条大路と右京三坊大路の交点部分の発掘調査が行われた[13]。その結果，藤原京条坊設定以前の溝から本薬師寺の軒瓦が出土し，また，伽藍の中軸線は右京八条三坊の中心より約５ｍ西へ寄っているらしい。このようなことから寺の占地と造営の着手は条坊施工より先行することが明らかとなったが，伽藍の詳細については今後の発掘調査に期待されている。

2　平城京における造営

慶雲４年（707），藤原京における薬師寺の造営が完成に近づいた頃，遷都の議がはかられ，翌和銅元年詔が出て同３年（710）３月10日平城に遷都された。飛鳥の弘福寺や斑鳩の法隆寺をのぞいて，大安寺（大官大寺）・薬師寺・元興寺（飛鳥寺）は平城京に移されることになり，一方藤原氏は興福寺を平城京東部の外京に造営した。

平城京における薬師寺の造営経過については『続日本紀』は何も記していない。『縁起』には養老２年（718）伽藍を移すと記しているが[14]，発掘調査によって伽藍北方の井戸から霊亀２年

8）『続日本紀』（以下『続紀』）。文武２年条。冬十月庚寅条。以薬師寺構作略了。詔衆僧令住其寺。

9）『続紀』大宝元年６月条。
壬子。以正五位上波多朝臣牟胡閇。従五位上許曽倍朝臣陽麻呂。任造薬師寺司。

10）『続紀』大宝元年７月条。戊戌。太政官處分。造宮官准職。造大安薬師二寺官准寮。造塔丈六二官准司焉。

11）『続紀』大宝３年正月条。
丁卯。奉為太上天皇。設斉于大安。薬師。元興。弘福四寺。

12）岸俊男「京域の想定と藤原京条坊制」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊藤原宮一国道165号線バイパスに伴う宮城調査』奈良県教育委員会　昭44。

13）奈文研『年報』1976。

14）『縁起』
爰弟元明天皇姫帝治九年文武。和銅元年戊申即位同二年。遷都奈良平城京。譲位於子飯高天皇姫帝治十四年。太上天皇養老二年戊午移伽藍於平城京。在大和国添下郡右京六条二坊十二坪東西三町南北四町東限堀川西限三坊大路南限六条大路北限五条大路。自天武天皇即位八年庚辰至干養老二年戊午所経卅九年本寺。自養老二年至干長和四年乙卯所経二百九十九年末寺。都合三百卅八年也。

(716) の木簡が本薬師寺式の瓦や奈良時代初頭の土師器などと伴出しており，この井戸は薬師寺造営工事に関連したものと思われるので，平城京薬師寺は養老2年以前からすでに造営が開始されていたと認められ，養老2年[15]は寺籍の移転を示すものでは分かろうか。従来，各寺の移転の時期について，「平城に遷（移）す」を造営開始の時と解していたが，和銅3年遷都は，天皇が遷られた時であるように，寺の場合も本尊の移座・新造等である可能性が強く，こうした点について今後検討を要するであろう。

養老3年（719）3月には造薬師寺司に始めて史生2人が置かれ[16]，同6年7月には薬師寺が僧綱の住居となり[17]，同年12月には元正天皇が金銀・供養具・布・米などを施入している[18]。養老年間にはその造営もかなり進んでいたことがわかる。

神亀3年（726）8月には元正太上天皇のために釈迦像を造り，法華経を書写して薬師寺において斎会を行ったが[19]，おそくともこの頃までには，金堂は完成しており，また本尊薬師三尊像も安置されていたものと考えられよう。

堂塔のうち建立年代が記録に見えるのは東塔だけである。『扶桑略記』や『七大寺年表』などによると，天平2年（730）3月29日に建立とある[20]。また，舎利は藤原京薬師寺では東塔に奉納されたが，平城京薬師寺では西塔に奉納されている。このことは平城の西塔は東塔よりも先行して建立されたことを示すものであろう。同4年（732）には令制諸寮の頭より上位の正五位上粟田朝臣上人が造薬師寺大夫に任ぜられている[21]。平城の造薬師寺司は，寮に準ぜられていた藤原京の造薬師寺司よりも充実した陣容を持っていたのであろう。

天平7年（735）には宮中及び大安・元興・興福の諸寺とともに薬師寺においても大般若経転読が行われた（『続日本紀』以下『続紀』とする）。東大寺建立以前においてはこの4つの寺が平城京の大寺であった。天平17年（745）5月，当時聖武天皇は甲賀宮にあったが，平城京薬師寺に4大寺の僧を集め，栗栖王を遣して京となすべきところを問うている（『続紀』）。

15）本報告書第Ⅴ章1木簡参照。

16）『続紀』養老3年条
　三月辛卯。始置造薬師寺司史生二人。

17）『続紀』養老6年7月条己卯。太政官奏言。内典外教。道趣雖異。量才揆職。理致同帰。比来僧綱等。既罕都座。縦恣横行。既難平理。彼此往還。空延時日。尺牘案文。未経決断。一曹細務。極多擁滞。其僧綱者。智徳具足。真俗棟梁。理義該通。戒業精勤。縮侶以之推譲。素衆由是帰仰。然以居処非一。法務不備。雑事荐臻。終違令条。宜以薬師寺。常為住居。

18）醍醐寺本『諸寺縁起集』「西大寺縁起」の項。薬師寺旧流記資財帳云。
一。金銀銅鉄銭鍬幷供養具。絁。糸。綿。長布。交易庸布。紺布。裌帳布。白米等有員。繁故略是。右以養老六年壬戌十二月四日。納賜平城宮御宇天皇者。
一。伎楽弐具。以天平三年辛未四月七日。同天皇納賜者。
一。奴婢四十七口五十六口。又四人五人。又八人卅八人。又十人七人。已上藤原御宇天皇。或伊賀比売朝臣。或官仰諸国買取。或平城宮御宇天皇納。或買等奴婢也云々。文繁故略之。
一。水田六百九十九町九段七十一歩大和・河内・摂津・山城・伊勢・近江・幡磨・備前等国。
一。野山一百八十五町一段三百十一歩大和・近江幡磨・紀伊
一。処〻庄三十三所　庄〻倉合一百三十口。屋六十三口。
一。通分稲四百七十三万三千七百九十四束六把八分四抄在卅五日。
一。食封百戸。在五国信乃国五十戸・常陸国百戸・武蔵百戸・讃岐国三百戸・伊与国五十戸。
一。利稲七万七千四百束。信乃国二千四百束・常陸一万五千束・武蔵一万五千六百束・遠江二千四百束・安房三千六百束・駿河二千四百束・甲斐千二百束・上総一万二百束・下総一万六千五百束・美乃八千百束。旧流記帳云。通分穀一万五千六百五十三石七升五合六夕。四千六百八十三石四斗四升在寺家内，一万九百六十九石六斗三升五合六夕在三国。

19）『続紀』神亀3年条。
　八月癸丑。奉為太上天皇造写釈迦像幷法華経訖。仍於薬師寺設斎焉。

20）『扶桑略記』天平2年条。
　三月廿九日。始建薬師寺東塔。
『七大寺年表』天平2年条。
　三月廿九日。始建薬師寺東塔。
『元亨釈書』（聖武）六年（天平2年）条。
　春三月。起東塔于薬師寺。
『一代要記』天平2年条。
　二年庚午。造薬師寺塔幷山階塔。

21）『続紀』天平4年10月丁亥条。「正五位上粟田朝臣人上為造薬師寺大夫」とある。大夫とあるところからみてこの造薬師寺司は職に準せられたものらしい。

天平感宝元年（749）閏５月には詔して諸寺に絁・布・稲を賜わった。この時大安・薬師・元興・興福の諸寺に東大寺を加えた５つの寺が筆頭になり，法隆寺がこれに続き，さらに弘福・四天王寺が続いている（『続紀』『天平感宝元年閏五月廿日勅書』）。同年７月に諸寺の墾田地の限を定めた時は，東大寺4000町，元興寺2000町に続き，大安・薬師・興福・大和法華寺，諸国の国分金光明寺が1000町，弘福・法隆寺は500町と定められている（『続紀』）。これらによって当時の薬師寺の地位がうかがえる。またこの天平感宝元年の５月，聖武天皇は薬師寺宮を御在所とし，天平勝宝２年（750）２月にも同宮に移っている。その位置は全くわからないが，寺内の一部を宮として使用したか，あるいは薬師寺隣接の地であったと考えられる（『続紀』）。

奈良時代造立の薬師寺内の別院として，吉備内親王が養老年間に造立された東院，舎人親王本願の西院があり，西院には天平宝字８年（764）称徳天皇発願の百万塔が分納されたと伝えられている（『続紀』，『縁起』の西院の項）。

藤原京および平城京における薬師寺造営のいきさつには不明なところが多い。平城京での造営に際して仏像や建物をどの程度移してきたものか，とりわけ現金堂本尊の銅造薬師三尊像と東塔が，藤原京からの移座移建であるか，それとも平城京における新鋳新築なのかどうかは，早くから建築史・美術史上大きい争点となってきた。

本薬師寺の遺跡には裳階の礎石は現存しないが，裳階を除いて本薬師寺と平城京薬師寺の金堂・塔の規模，相互関係は同一である。また，発掘調査によっても平城京薬師寺からは本薬師寺と同じ瓦が大量に出土しており，建物の一部が移されてきた可能性は大きい。

現存する塔東に関しても，裳階を本薬師寺のものとする見解もあるが，平城京における新築と考えて不都合なところは全く認められない[22]。本薬師寺東塔の礎石では主屋側柱礎石に地覆座の造出しがあり，一方，平城京薬師寺東塔では主屋側柱は開放で裳階に壁が付くといった相違点がある。『諸寺縁起集』（護国寺本，醍醐寺本）に「流記云。宝塔四基。二口在本寺云々。」とあるのをみても，現在のところ東塔が移建されたとする証拠はない。

本尊の薬師三尊像については，本薬師寺本尊として持統２年（688）正月の無遮大会までに造られ，のち平城京薬師寺に移されたとする移座説，平城京において養老・神亀年間頃に新しく造られたとする非移座説などがある。現在では非移座，すなわち８世紀当初の鋳造とする見解が有力であるが，なおその結論を得ていない。

講堂に安置されていた高３丈，広２丈１尺８寸の繡仏は壬辰年（持統６年，692）に天武天皇の御為に持統天皇が造られたものが平城京薬師寺に移されたものである（『縁起』）。

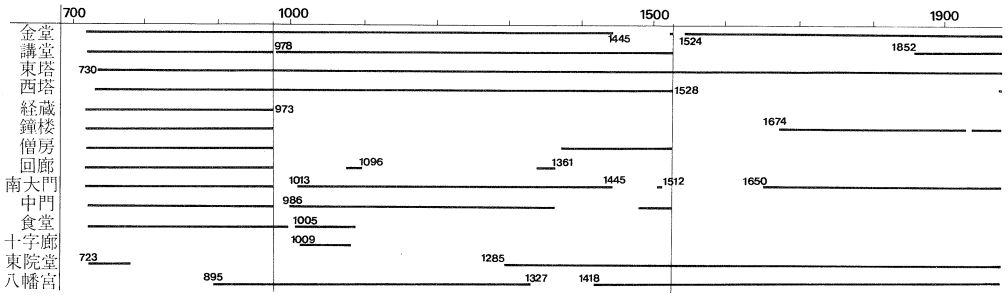

Fig. 1　堂宇興亡表

22）宮上茂隆「薬師寺宝塔の研究」『日本建築学会論文報告集』226・248・251号　昭49～52。
浅野　清『薬師寺東塔の調査』薬師寺　昭56。

3　寺地と伽藍

寺地については，『縁起』に「一　寺内流記帳云」として，寺院地16坊４分の１，そのうち，４坊堂塔幷僧房院，２坊大衆院とし，さらに５坊塔金堂幷僧坊等院以下が続いている。『縁起』所収の永保２年（1082）の『僉議状』にも，「去天平年中及宝亀注録寺家流記云」として，寺院地を同様16坊４分の１とし，４坊塔金堂幷僧坊等院，２坊大衆院を本寺すなわち本薬師寺にあてている。本薬師寺の伽藍中心部は，藤原京右京八条三坊のほぼ中央を占める。大衆院は明らかでないが，北方の右京七条三坊の南半部であろうか。

平城京薬師寺は右京六条二坊にあり，その南大門を六条大路に開き，伽藍中軸線は二坊大路から１町東の小路心とする。奈良時代の寺地は『流記』によれば10坊４分の１である。『縁起』には「今案垣内十二町」とし，『僉議状』にも『新録』にいうとして，寺内12町，東西３町，南北４町を右京六条二坊の五坪から十二坪にあて，平安時代には寺地の範囲が拡がっている。『流記』では，塔金堂幷僧坊等院に５坊，大衆院・苑院・温室幷倉垣院に各１坊，賤院に２坊をあてる。『僉議状』では，塔金堂僧房等院と大衆院がぬけているが，４分の１坊を花苑院とするので，塔金堂幷僧坊等院５坊，大衆院・苑院・温室幷倉垣院に各１坊，賤院２坊，花苑院４分の１坊とすれば『縁起』にいう10坊４分の１となる。４分の１坊を足立康は秋篠川との間にあてたが，福山敏男は花苑院として六条大路の南にあてている[23]。『縁起』は境内12町を堂院４丁，別院２丁，政所町４丁，職掌町２丁とするほか，東３丁宿院地，南２丁花苑幷八幡宮とし，政所町４町は政所大炊院，修理温室院，苑院，西茔（ママ）坂院と蘭院各１町とする。『流記』と比較すると，奈良時代と平安時代では，五・六坪の取扱いが違っていて，巽２町の別院は奈良時代には寺内の扱いではなかったらしい。福山は薬師寺宮や僧綱所がこの位置に当る可能性を指摘している。八幡宮が勧請され，最勝会が始められてから宿院が設けられてくると，垣外の部分はさらに広がり，八幡宮は花苑院とともに六条大路の南の七条二坊・九・十六坪を占めることになる。秋篠川との間は宿院の地にあてられたことが考えられよう。

また，薬師寺は，奈良時代には諸国に水田699町９段71歩，大和など４個国に野山185町１段311歩，庄33個所，庄の倉130口，屋63口，信濃など５個国に食封600戸を持ち，そのほか多数の利稲・通分稲・同穀を所有していた[24]。木津（泉）には木津川南岸に大安寺所有の木屋・園地とならんで薬師寺の木屋があった[25]。

伽藍の主要な建物の形式・規模等は『縁起』に記されているところであるが，近年の発掘調査によって数多くの新しい成果があげられ，伽藍の旧状はかなり明らかになってきている。金堂・西塔と東西僧房の食堂両脇部の全域，南大門・中門・回廊・講堂・鐘経楼・食堂・小子房・十字廊や伽藍北方の付属建物の一部などを発掘調査し，東院・西院に関する遺構の一部も確認され，現寺域外においても西面大垣などの調査が部分的に行われている。

南大門・中門のように調査結果と『縁起』の記載に大きな相違があったものもあるが，『縁起』の記録の多くは古代の状況をよく伝えていることが発掘によって裏付けられている。

23）足立康「奈良時代に於ける薬師寺の占地」『考古学雑誌』21巻８号　昭６　『古代建築の研究上』中央公論美術出版　昭61。
福山敏男・久野健『薬師寺』東大出版会　昭33
福山敏男『寺院建築の研究上』中央公論美術出版　昭57。
このほか，薬師寺の寺地について，田村吉永・村田治郎・大岡実らの論考がある。

24）注18に同じ。

25）『大安寺伽藍縁起幷流記資財帳』の「合處處庄拾陸處」の項。

4　平安時代の薬師寺

延暦3年（784）に都は長岡京へ移り，さらに同13年再び平安京に移った。平安京においては，新しく東西両寺を建立し，平城京の諸大寺はいずれもそのまま奈良に残ったが，『延喜式』の「玄蕃寮」の項には，15大寺として東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・薬師寺・西大寺・法隆寺・新薬師寺・本元興寺・招提寺・西寺・四天王寺・崇福寺・弘福寺・東寺をあげている。これをみると，平安京の東寺・西寺，難波の四天王寺，滋賀の崇福寺のほかは，飛鳥奈良時代に創められた大和の寺院である。

薬師寺では，天長7年（830）直世王の奏状によって，毎年3月に最勝会が行われることになった[26]。この最勝会の講師は正月の宮中大極殿御斎会の講師を経た者をあて，読師には寺内の苦修練行の僧があてられ（『延喜式』「玄蕃寮」），その供料には播磨国賀茂郡にある薬師寺田70余町[27]があてられた。また，講師の布施は内蔵寮から，読師の布施は春宮坊または中宮職から送られ（『延喜式』「春宮坊・中宮職」），会料の黒米は大和・近江の正税各60石を用いた（『延喜式』「主税上」）。三会の講師をすべて勤め終った僧から僧綱が任命される定めでもあった（『元亨釈書』，『今昔物語』，『三宝絵詞』）。

現在，南門外の一郭に八幡神社が鎮座しているが，ここには八幡神・神功皇后・仲津姫がまつられ，寛平年中（889～897）別当栄紹大法師が当寺の鎮守として勧請したと伝えられる（『朝野群載』，『石清水八幡宮記録』，『榊葉集』）。この地は六条大路の南側になるが，早くから寺地は六条大路の南にも及んでいたようで，『今昔物語』には「南ノ大門ノ前ニ昔ヨリ八幡ヲ振リ奉テ寺ノ鎮守トセリ」とあり，勧請当初から社殿は現在の地にあったと考えられる。この地は休息（やすみが）岡（おか）ともいわれ，行教が八幡神を宇佐から大安寺に勧請した際にここで休息したと伝えられるが[28]地名による説話であろうとされている。

天禄4年（973）2月27日，薬師寺は，平城京移転後はじめての大火に見舞われた。『縁起』（以下，天禄火災とその復興について特記しない事項は『縁起』による）によると，火は食殿（十字廊）の堂童子宿所から失火し，食堂・講堂・僧坊・回廊・中門・南大門・経楼・鐘楼などが焼失し，金堂と東西両塔が残ったのはまさに奇跡というべきで，伽藍の主要部のほとんどが焼失したという[29]。金堂裳階の西面にも火が移ったが，寺僧神鎮と職掌清額・礼宗が身をすてて火を消した。火災直後の3月5日には勅使左小弁源伊渉等が実検に訪れた。その後の再興は宣旨を下して諸国に割当てる造国制をとることとし，『縁起』によれば次の9個国に割当てられた。

大門―大和　中門廡廊卅間―備前　廡廊卅間―備後　同廿二間―安芸　同十四間・食堂―播磨　経楼―周防　鐘楼・東院房―美濃　東南僧坊―伊予　西南僧坊―讃岐

これらのほかに講堂は別当趂然が造立することになった。しかし，『日本紀略』ではこれら諸国への割当てを10個国として上記の国のほか伊賀と備中が加わり，備前が見えていない[30]。

同じく天禄4年5月15日の宣旨では，平超が檜皮葺僧坊（講房）の行事，朝静が鋳鐘の行事，

26）『類聚三代格』の天長7年9月14日太政官符。「応令薬師寺毎年修取勝王経講会事」。

27）注26に同じ。

28）『薬師寺濫觴私考』八幡宮項に「講式曰」として，「（前略）行教和尚三衣之袂而自宇佐宮来臨之時。於此岡垂休息之儀。故名謂休息岡」と見える。

29）『縁起』。抑別当大法師趂禅任中天禄四年癸酉二月廿七日夜従食殿堂童子宿所盧外失火　食堂講堂三面僧房四面廊中門大門悉以焼亡

30）『日本紀略』天延元年2月27日壬子条。亥刻。薬師寺焼亡。所遺金塔一基。（同5月30日丙辰条）。被定可造薬師寺之国々。大和。伊賀。美

寺主慶空が曲殿2宇を造る行事，右少弁高階真人成忠が造講堂長官に左少史三統宿弥が判官に任ぜられたが，この年は御忌方に当るため造営が止められた。しかし，講堂は別当趂然によって6年間かかって仮葺で再建され，火災後西院堂で行われていた最勝会が貞元3年（978）から新しい講堂で行われるようになった。また，天元2年（979）別当になった平超が下閣などの造営をして再建が完成した。

諸国に割当てられた造営はほとんど進まなかったと見え，中門は別当平超が寛和2年（986）に再建，扉3間と二王像は次の別当増祐が寛和3年から同9年にかけて造り終えた。南大門は増祐が寛弘3年（1006）に柱を立て，長和2年（1013）に造り終え，金剛力士・師子形等の作料は備中講師が負担して寛弘9年（1012）に造り始めた。回廊は備前・備後・安芸・播磨4ヶ国に割当てていたが，その後の宣旨によって周防国が13間を造立し，他は平超と増祐が造立した。周防は始めの割当てでは経楼であったが，天元3年（980）周防守清原元輔が「造薬師寺廊功」で叙位を受けている[31]。平超の別当就任は天元2年，または永祚元年（989）ともいわれ，増祐は長保元年（999）別当になっており[32]，回廊の完成は11世紀始めと思われるが，なお連子・壁・脇門等は未完で，長押も部分的に打たれたが，未完成の部分があった。

食堂は増祐が長保元年から7個年で再建し，火元であった十字廊は増祐が寛弘2年に再建した。鐘は火災後まもなく勝光寺の鐘を運んで西岡の上にかけたが，長保5年（1003）の僧綱所の牒によって，旧楼の跡に仮屋をかまえ，興福寺別院建法寺の鐘を移した。

『今昔物語集』では3年で再建が終了したように記すが[33]，実際にはほとんど朝廷の力が及ばず，寺院側の努力によって約40年を要して再建された。長和4年（1015）に『縁起』が撰述されたのも，この復興の完成を記念してのことであろう。この復興の進む間に，貞元2年（977）2月8日夜，宝蔵が焼けたと伝えるが（『日本紀略』），『縁起』には記載がない。永祚元年（989）8月の大風で金堂上層が吹き落されたが，別当平超が直ちに復旧している（『縁起』）。

鎮守八幡神社では，天暦年間（947～965）法華経の講演が始められ[34]，寛治の頃（1087～1093）障子絵神像が描かれた[35]。長和3年（1014）から長暦元年（1037）の間に別当輔静が東院に八角堂を建て，その本尊丈六釈迦像は大安寺本尊を模して定朝が造像した[36]。

万寿2年（1025）11月に源頼経は本薬師寺に宿泊しており[37]，本薬師寺はまだ寺院の体裁を保っていたと思われるが，かなり荒廃していたらしい。嘉保2年（1095）10月には本薬師寺塔跡から銅壺入り3粒の舎利が発見された。翌永長元年（1096）5月には藤原師実が平城京薬師寺

濃。播磨。備中。備後。安芸。周防。讃岐。伊予十ヶ国也。『親信卿記』。天延元年五月三日。左大臣已下定申可造薬師寺事。定申云。以諸国十ヶ国可造進云々。依請。

31）『三十六人歌仙伝』。従五位上行肥後守清原真人元輔。（中略）天延二年正月任周防守。八月兼鋳銭長官。天元三年三月十九日。叙従五位下。造薬師寺廊。（以下略）

32）『薬師寺別当次第』では趂禅は天延2年(974)任，平超は永祚元年（989）任，増祐は長保元年（999）任とするが，『縁起』では天禄4年（973）の火災を別当趂然任中とし，平超は天元2年（979）7月28日任とする。

33）『今昔物語集』巻十二。薬師寺食堂焼不焼金集語第廿。

34）『薬師寺濫觴私考』の「十講会」の項。

35）重要文化財板絵神像裏面朱添銘。

36）『七大寺日記』。金堂ノ東ニ有唐院ト云所。（中略）傍ラニ八角瓦葺宝形造堂アリ。薬師寺別当補清已講。以定朝令奉造丈六釈迦像アリ。可拝見。
『七大寺巡礼私記』。
東院八角宝形。安丈六尺迦坐像定朝造之。
口伝云。斯堂者在唐院之傍。薬師寺別当輔精已講私之建立也。仏像者誂定朝。模大安寺之尺迦所奉造也。
『薬師寺別当次第』によれば，輔静は長徳4年（998）権別当になるが，長和3年（1014）別当となり，23年その任にあったので，長暦元年（1036）まで務めたことになる。

37）『左経記』万寿2年11月9日条。

でこれを拝見している。[38]『中右記』では「元是在本薬師寺塔下地底」とか，「試掘塔底地深数見(尺ヵ)」と記している。大江親通が嘉承元年（1106）に奈良巡礼をしたときに記した『七大寺日記』では，「古京本薬師寺之塔心柱礎石下ヨリ掘出テ所奉渡之舎利也」とするが，親通が保延6年（1140）に再び巡礼したときの『七大寺巡礼私記』では「自心柱礎中所奉掘出也」と記し，この舎利は遺跡から考えると，東塔心礎の舎利孔から発見されたものであろう。当時すでに本薬師寺東塔は廃絶し，他の建物も同様な状況だったものと思われる。『中右記』によると，永長元年（1096）11月24日の大地震で回廊が転倒した。[39]『七大寺日記』及び『七大寺巡礼私記』によれば，この頃平城京薬師寺では，金堂・東西両塔・講堂・食堂・唐院・東院八角堂が残っており，門・回廊などの記載はないが，伽藍の主要部は天禄復興後の姿をほぼ伝えていたらしい。また，諸堂・諸院の名の見えるものは長保4年（1002）に伝教院円堂，永承2年（1047）以降に西院念仏堂，永久4年（1116）に西北室，東唐院，元永元年（1118）に東北院，承安5年（1175）に喜多院がある。[40]保元元年（1156）4月13日には興福寺大衆によって焼かれたがその状況は明らかでない。[41]永万2年（1165）には別当行恵が堂塔の修造を志している。[42]

5　中世以後の薬師寺

鎌倉時代になると，兵火で焼かれた東大寺，興福寺をはじめ，南都の諸寺院の復興が目ざましく，各寺院とも建物の造営・修造が相次いで行われている。

薬師寺では興福寺の僧円玄が修造を行い，その功で建仁元年（1201）に律師に任ぜられた。[43]俊乗坊重源の『南無阿弥陀仏作善集』の結縁の項には薬師寺塔が見える。また，「薬師寺仁治壬寅」の文字を入れた軒平瓦があり，壬寅年は仁治3年（1242）に当るので，この頃に塔などの修理があったものと思われる。[44]建治3年（1277）には西塔に落雷があったが，覚慶らが火を消し止め，その功によって覚慶は弘安2年（1279）2月に戒壇大十師職に任ぜられた。[45]

現在の東院堂は弘安8年（1285）の建立であり，[46]鎮守八幡神社では脇殿にまつられた障子絵

38）『中右記』永長元年5月21・23日条。承徳2年10月12日条。嘉承元年8月21日条。

39）『中右記』永長元年11月24日裏書。後聞。地震之間。近江国勢多橋破了。纔東西片辺残也。東大寺鐘落地者。薬師寺廻廊顛倒。東大寺塔九輪落。

40）伝教院円堂―石山寺蔵『法華義疏』奥書。西北室，東唐院，東北院―『法隆寺一切経』奥書。西院念仏堂―保延2年（1136）「法隆寺金光院燈油畠注文案」，永承元年（1046）「長仁紛失状裏書」。喜多院―承安5年（1175）「大法師諦覚　質地券」，治承2年（1178）「僧諦覚田地売券」『平安遺文』。

41）『興福寺略年代記』保元元年条。四月十三日興福寺大衆焼失薬師寺。依倍臚会日闘諍也。

42）永万元年（1165）「薬師寺別当行恵申状」（陽明文庫所蔵『兵範記』仁安2年夏券裏文書）『平安遺文』。

43）『興福寺別当次第』。権別当法印権大僧都円玄の項。貞応三年四月廿八日任。五十。建仁元年五月廿一日任律師薬師寺修造功別当雅縁譲。廿七。承元三年講師卅五。（以下略）

44）本報告書参照。

45）『薬師寺黒草紙』

政所府　戒壇大十師職事伝燈法師位覚慶

右件法師。常住伽藍年尚。其上。去建治三□廿六日。当寺西塔。悪龍落。懸雷火。付塔婆之。（中略）。仍其勧賞所補任大十師職如件

弘安二年乙卯二月　日

別当法印大和尚位権大僧都在御判

46）①弘安8年（1285）棟札。「奈良県金石年表」『第三回・第五回奈良県史蹟名勝地調査会報告書別冊』奈良県（大正7）に，「薬師寺東院堂棟札，長9尺2寸8分，巾6寸，厚7分，檜製」として見える。現在所在未確認。

弘安八年乙酉三月廿一日建立之大工末清国重権大工宗蔵

延宝二年甲寅卯月八日蓋北原破損了

奉行承仕長音瓦師肝煎五兵衛宗三郎　助左衛門

なお，この棟札は『薬師寺沿革紀要』に「東禅院堂棟銘二牘写」の1として見える。

②弘安4年（1281）軒平瓦（文字瓦）銘。

弘安東寺薬師院辛己

神像が永仁3年（1293）に描き直されている。[47] この鎮守八幡神社は嘉暦2年（1327）に焼けていると伝えられるが，[48] やがて再建されたものと思われる。

鎌倉時代の瓦にも多くの種類があり，金堂・西塔から発掘されたものが特に多く，伽藍の各建物にもさかんに修造が行われたと思われるが詳細は明らかでない。

天禄火災の復興後は余り大きい災害もなかったが，室町時代になると次々と災害に遭って伽藍は荒廃の一途をたどることになる。

康安元年（1361）6月の大地震では金堂の二重が傾き，塔は1基の九輪が落ち，1基は大いにゆがみ，また，中門・回廊や西院も転倒し，その他の諸堂も破損した。[49] 応永14年（1407）に東院堂の屋根修理があったらしいが，[50] 文安2年（1445）6月の大風では金堂・南大門などが倒壊し，随所で建物が破損した。[51] 金堂はすぐに立柱を行なったが，[52] 復興の途中で長らく放置されていたようである。長禄4年（1460）にも金堂の勧進が続き，[53] 文正元年（1466）には足利義政が朝鮮国王に親書を送って薬師寺復興への助力を求めている。[54] 大永4年（1524）にも金堂と東西両塔の再興勧進を行なっているが，[55] 復興はなかなか進まなかったようである。文明3年（1471）

47）重要文化財板絵神像6面は，裏面朱漆銘によって画き改めたことが知られる。この絵を描いたのは法眼堯儼で，安芸法橋堯尊の弟子，南都一乗院方吐田座に属した。（『尋尊大僧正記』）。真保　亨「板絵神像」『奈良六大寺大観　第六巻』「薬師寺」岩波書店　昭55。

48）『榊葉集』薬師寺。寛平年中為鎮守了。嘉暦二年月日焼亡了。

49）『嘉元記』康安元年辛丑六月二十二日卯時地震在之。（中略）同月廿四日。卯時。大地震在之。（中略）薬師寺金堂ノ二階カタフキ破。御塔一基ハ九輪落ヌ。一基ハ大ニユカム。中門・廻廊悉顛倒。同西院顛倒。此外諸堂破損云々。

50）土井実『奈良県銘文集成』大和歴史館研究会昭31　東院堂平瓦銘
ヲウエイ十四ネン十一月十八日
ヒコ次郎ノ吉重
ただし，東院堂とは記されていないので，東院堂の瓦として作られたものかは確証がない。

51）『大乗院日記目録』文安2年（1445）条。
六月二日。大風。薬師寺金堂以下顛倒。在々所々破損。希代事也云々。
菅家本『諸寺縁起集』
去文安元（二ヵ）年六月二日。大風顛倒。本尊等大略破失云々。只彼金銅三尊許于今在之。御堂其後如形建立。為源家氏寺云々。
南大門
安金剛力士云々。同文安大風顛倒了。
『東大寺堂方方年中行事記』文安2年条
（六月）□□二日。大風ニ薬師寺ノ金堂クツレ畢。折節。為祈雨。寺僧等□ヲヨミ侍ケルカ。公文所ヲ初テ。寺僧等以上四人当座ニヲシ打レ死了。（中略）同南大門コロフ。

52）『東大寺堂方方年中行事記』文安2年条。七月八日。薬師寺金堂棟上在之。

53）『大乗院寺社雑事記』長禄4年4月13日条一。
薬師寺金堂勧進捧伽加判事。信専令由之間。加判了。両門以下悉以令申云々。

54）『善隣国宝記』（『薬師寺縁起国史』にも引く）
文正元年丙戌　遣朝鮮書　綿谷製之
日本国源義政。奉書朝鮮国王殿下。
（前略）本邦南京。
有教寺。名曰薬師。比年堕壊。風震雨凌。殆泣竜象。於是一衆相与謀曰。産薄力微。無由重興。非求助於大邦。豈有他術哉。（後略）
竜集丙戌春二月廿八日
日本国源義政

55）「大永四年勧進状」（『薬師寺文書』，『薬師寺縁起国史』に引く。『薬師寺濫觴私考』にも引くが後を欠く。）
南都薬師寺勧進沙門某敬曰
請特蒙縞素貴賤之合力。再興当寺金堂幷東西両塔之状
（前略）然去文安乙丑之暦。季月上澣之天。魔風頻吹来。金堂悉顛倒。時逮澆薄世。至劫末故也。於本尊者無其恙。脇士日光月光二菩薩然不能崩倒。大衆雖沈驚愕之愁。諸人傍成奇特之思。其年雖有立柱之儀。永抛営作。由送数十廻。夜霜屢湿大悲之膚。夕嵐時破忍辱之袂。悲歎尤切也。就中顧東西二基之塔婆。移如来八相之化儀。以淤泥造厳堀。聚土石為仏像。識是聚沙為仏塔之功徳無疑。一称南無仏之金言有頼者哉。雖然。同侵颶風。数覃地震。玉輪珠盤傾斜。金鐸宝網朽損。悲哉。土仏之尊容。雨打易破。衣座之衆色。露侵欲消。見聞之道俗。誰不傷嗟耶。爰某蒙十方檀越之蔭力。欲遂堂塔興癈之願望。冀墾志所及。莫軽小財。若尓奉加助成之輩。与善結縁之衆。現世誇無病長寿之巨益。当来遂往生仏国之素懐。乃至無辺群類同至覚岸而已。仍粗勧進之状如件。
大永肆年甲申八月日

正月23日には新坊を焼きはらわれ[56]，同4年10月16日には土民の蜂起で勅使坊を焼かれたが[57]，もと西院西門であった現南門が永正9年（1512）に建てられている[58]。

その後も永正13年（1516，或は，10年とも伝える）に，西室・西院・養天満拝殿が兵火にあって焼失し，八幡宮参籠所が破却され，同16年にも八幡宮神楽所が破却された[59]。

最も大きい被害を蒙ったのは享禄元年（1528）8月27日の筒井方と越智方の兵乱によるものである。この時西塔に放火されて金堂・西塔・講堂・中門・僧房などの主要建物のほとんどが焼失し，僅かに東塔・東院堂などがかろうじて兵火を免れたのみであった。この焼失の年を『薬師寺縁起国史』に引く旧記などでは享禄2年5月28日としているが，焼失建物の中に講堂・中門・僧房は見えていないので，この大被害は享禄元年のことと考えた方が妥当であろう[60]。

焼失した金堂は享禄4年には番匠始めを行ない，堂内の柱を立て，天文14年(1545）までかかって柱を立て終った。同年は工事が進捗して組物を組み，弘治3年（1557）には軒廻りの工事が行われたが，この時の小屋組は仮屋程度のものであったらしい[61]。『薬師寺志』や『濫觴私考』は，慶長2年（1597）にも金堂が焼失し，同5年に再興したと記すが，これは誤記であり，同5年に当時の郡山城主増田長盛によって小屋組が改造されて屋根が瓦葺とされ，金堂としての体裁を整えたものと考えられる[62]。しかし二重裳階付きの姿は再現されず，旧裳階部分を取込んだ1重の仏堂となった。天文8年（1539）6月の大風にも建物に被害があり，東塔・東院堂・八幡宮御廊などの修理が行われている[63]。

八幡神社は嘉暦2年（1327）に焼け，応永25年（1418），宝徳2年（1450）に遷宮，明応元年（1492）造替，永正12年（1515）修理，（上遷宮は大永5年，1525）同13年参籠所破却，同16年神楽所破却，天文12年（1543）南御廊修理，同15年社殿造営があった[64]。しかし慶長元年（1596）閏7

56）『大乗院寺社雑事記』文明3年（1471）正月23日。一　法花寺雑倉焼亡。又自郡山押寄薬師寺新坊拂地畢。古市以下寄衆也。

57）『大乗院寺社雑事記』文明4年10月17日条。一　昨日為土民沙汰。薬師寺之勅使坊焼之云々。

58）「正面西控柱上肘木上端墨書」『薬師寺東塔及び南門修理工事報告書』奈良県教育委員会　昭27。永正九年壬申三月四日大工次郎四郎奉行衆頭領□□

59）『薬師寺年記』（慶長4年，1599奥書）当年（永正14年，1517）丁丑夜荘厳頭事。去年国中悤劇言語道断乱吹。則十月五日筒井方被取負了。然間其刻。矢田中村沙汰而。西室西院放火。八幡宮参籠所坊打破。養天満拝殿放火。

『薬師寺濫觴私考』旧記云。文亀皇帝（後柏原）永正十年癸酉。去年国中悤劇。十月十五日筒井順慶敗北之刻。矢田中村当寺ニ打入。西室西院艱天満拝殿放火。参籠坊寺中寺庫等破却。為寺敵神敵之最矣。同十六年己卯八幡神楽所等破却。

60）『薬師寺年記』。去年戊子初九月九日。依兵乱金堂講堂中門西塔等炎上之間。当年享禄二年己丑修二造花勧行在所。可為如何哉之処仁。任転倒之例。於東院之堂被修之。

『薬師寺志』当寺古文書ニ云。享禄元年八月二十八日。筒井興法印企謀叡。（中略）（9月7日）自秋篠当寺へ馳入リ。金堂。講堂。中門。西塔。僧房。端端於在家者。自五条至九条迄。悉以放火。言語同断之義。驚歎無極者也。寺衆は皆以奈良中に隠居。八日早朝に立帰る。云々此後者。仮堂にて本普請に至らざる處。又もや慶長二年五月二十八日。超昇寺村の何某の兵火に罹りて此仮堂も塵となる（後略）。

『薬師寺濫觴私考』。同記（旧記）云。享禄皇帝後奈良院元年戊子九月七日。金堂講堂中門西塔悉兵火。二年己丑修二任文安顛倒之例。於東院堂修之。

『薬師寺縁起国史』は「旧記云」としてこれを享禄2年5月28日のこととし，西塔に火を付けて金堂へ移り，この2棟の焼失を記している。

61）旧金堂（現興福寺仮金堂）大斗及び垂木発見墨書。『興福寺仮金堂建設工事報告書』興福寺昭50。

62）旧金堂棟木慶長5年（1600）墨書。注61参照。

63）『上下公文所要録』（薬師寺）。

64）嘉暦2年焼失―『榊葉集』，応永25年遷宮―『東院光暁日記』，宝徳2年遷宮―『西院堂方諸日記』，明応元年造替―『大乗院寺社雑事記』，永正12年修理―『八幡宮御遷宮下遷宮上遷宮之引付』，永正13年破却―注59参照，永正16年破却―注59参照，大永5年遷宮―『薬師寺八幡宮遷宮日記』，天文12年修理―『上下公文所要禄』，天文15年造営―『八幡宮御遷宮日記』。

月12日の大地震では御廊が西院堂と東西両門などとともに倒壊したが[65]，回廊はまもなく復興している。慶長2年に北大門が造られ[66]，同8年には豊臣秀頼が片桐且元を奉行として八幡神社を造替した。現存する社殿はこの時のものである[67]。

現在東院堂の南に建つ竜王社社殿はもと西方の竜王山にあり，明治維新時に境内へ移されたものである。この社殿は天文14年（1545）に上棟され，元亀2年（1571），天正8年（1581），寛永5年（1628）などと再三の修造をへている[68]。

江戸時代には，寛永2年（1625）八幡神社中門修理[69]，同17年八幡神社社殿修理[70]，慶安3年（1650）に現南門を移建[71]，万治3年（1660）には文殊堂を西塔跡に移建[72]，延宝2年（1674）には鐘楼建立と東院堂の修理があった[73]。元禄12年（1699）の『薬師寺現前諸伽藍并神社覚』によると，金堂・東塔・東院堂・文殊堂・鐘楼・大門・脇門・西院不動堂・同弥勒堂・仏餉屋・鎮守八幡宮・同回廊・同楼門・八幡若宮・弁才天社・養天満社・竜王社・天神社が見える。その他，江戸時代初中期の寺蔵古図3種及び『大和名所図会』などによって当時の境内の状況が知られる。

Fig. 2　薬　師　寺　絵　図・部　分

65）『薬師寺濫觴私考』。同記云。文禄皇帝慶長元年丙申閏七月十二日大地震。逾月不止。八幡廊西院堂。東西両門等悉崩焉。

66）『薬師寺志』。北大門　桁行二間　梁間一間半棟札に云。慶長二年丁酉七月二日造立之。

67）慶長8年の棟札が2枚あり。その1枚に次のように記す。
当社八幡宮御造営之事慶長八年癸卯正月十八日釿初在之　一。此御造営御施主内大臣正二位豊臣朝臣従秀頼卿被仰付御沙汰之造営也。奉行東市正且元被仰付。同廿七日下遷宮也。当三社事不及申瑞籬并楼門同南之御廊已上新造之御造営也。東市正且元為下奉行梅戸平右門烝特次右門烝両人被仰付。同六月下旬悉以成就畢。仍同廿六日上遷宮沙汰在之。（中略）于時慶長八年癸卯六月廿六日。寺僧等敬曰。
このほか，『西院堂方諸日記』，『濫觴私考』，『沿革紀要』などに見える。

68）竜王社社殿野棟木，内外陣境扉の墨書銘及び『沿革紀要』，『薬師寺志』による。

69）『薬師寺沿革紀要』。

70）脇殿蟇股墨書，『薬師寺八幡宮下遷宮之事』。

71）『薬師寺縁起国史』。慶安三年庚寅西院西門引移金堂南門。為南大門也。
そのほか，同年の地垂木墨書，降棟鬼瓦刻銘。『薬師寺志』には慶安3年3月の棟札があったとする。

72），73）『薬師寺志』。

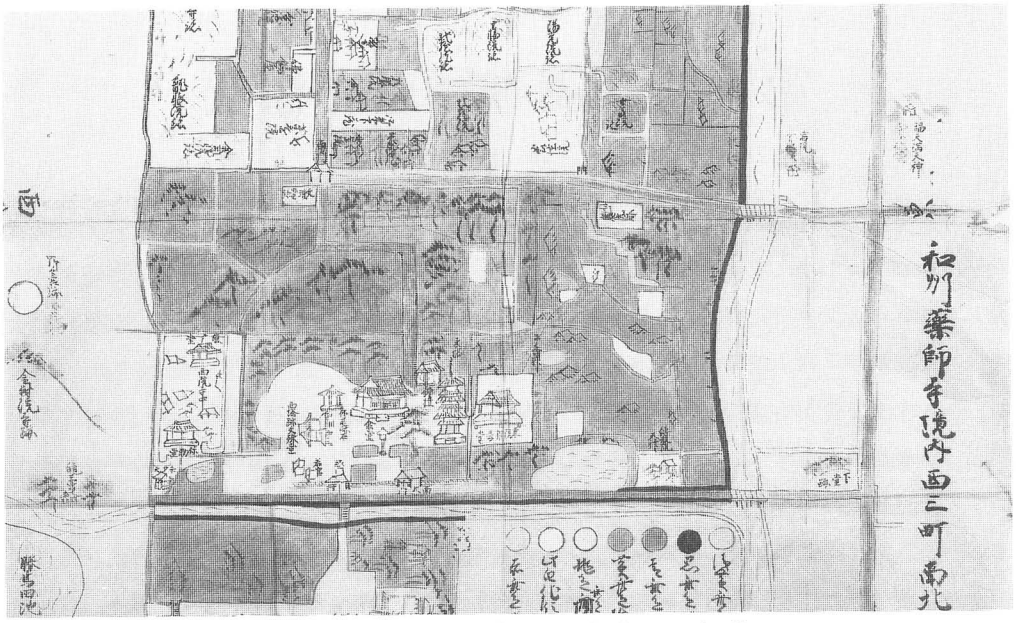

Fig. 3　薬師寺中之図・部分

宝永４年（1707）の地震で八幡宮楼門・同御廊・金堂・護摩堂・弥勒堂が破損し，塔は九輪が折損した[74]。享保18年（1733），東院堂の向きを南面から西面にかえて基壇を高めており[75]，寛保元年（1741）から安永６年（1777）にかけて金堂の大修理が行われている[76]。弘化５年（1848）から安政３年（1856）にかけては講堂が再建され，西院にあった銅造薬師三尊像を安置した[77]。このほか，寺蔵日記類などによると小修理は再三行われていたことがわかる。

明治30年（1897）に古社寺保存法が制定され，国宝東塔は明治31年から33年，国宝東院堂は大正元年（1912）から２年にかけて解体修理を受けている。近年では，昭和23年（1948）から24年に重要文化財若宮社社殿解体修理，同24年から25年にかけて重要文化財八幡神社社殿の半解体修理，同25年から27年にかけて東塔の屋根葺替修理と重要文化財南門解体修理を行なった。昭和41年には重要文化財美術工芸品収蔵庫（大宝蔵殿）が完成し，同27年から33年にかけて金堂の国宝薬師三尊像及び須弥壇の修理が行われ，同51年総合的な防災施設が完成している。

近年，伽藍の復興が進み，昭和51年４月金堂が当初の姿に復興され，同年西僧房，同55年東僧房を建て，同56年４月西塔の復興が竣功した。つづいて中門が昭和58年に完成している。なお，伽藍整備にともない，昭和51年に若宮社社殿を旧位置に移して翌年屋根を葺替え，55年には八幡神社社殿の屋根葺替工事を行なった。

74）『西院堂方講日記』　一。宝永四丁亥十月四日。午未ノ刻ノ間ニ当リテ大地震。八幡宮楼門石居五，八寸（六カ）斗落入。御廊破損ス。御殿者無別条。金堂・塔九輪折。其外伽藍損ス。当寺護摩堂・弥勒堂破損ス。依之修理之也。

75）『薬師寺沿革紀要』に引く享保18年の東禅院堂棟銘の写しの中に，「此堂南向地甚下。願者築地引殿可西向。然則除水湿之難。有信緇素諸有便也。衆人一同親荷土運木。侵寒熱盡力故。自遠近而助力亦多。終築地五尺。引大殿為西向。修造終矣」と見える。

76）寛保元年から安永６年にかけて行われた金堂の大修理は４期に分れ，寛保元年は正面，延享３年（1746）頃に背面，明和９年（（1772）頃に西側面，安永６年（1777）に東側面を行い，側廻りの柱はすべて取替えられた。

77）『薬師寺古記録抜萃』所収「文化四丁卯年十一月御修理の儀寺社御奉行所之奉願上願書之写」。『薬師寺沿革紀要』。孝明天皇御宇弘化五年戊申。彙喜捨之浄財。営構大講堂中以西二門世（也カ）。爾来造於東廿二間。亦自嘉永四年辛亥至嘉永五年壬子。造於東二間也。於茲大殿全成也。
入仏供養法会は，安政３年（1856）３月12日から18日まで行われている。